ドイツ・スペイン・イタリア視察報告書

２０１７年１１月５日～１２日

今回議員派遣により、ドイツ・スペイン・イタリアを調査、視察させていただきました。
その目的は、ドイツにおける林業、木材産業振興に関する調査、事業所の経営手法等の視察、スペインでは、マドリッドにおいて県産品取扱い候補店の視察、岐阜県観光プロモーションイベント及びキッチンスタジオでの飛騨牛ＰＲイベントの視察、サラマンカにおいてパイプオルガンを通じた文化交流事業の調査、イタリアでは、県内小規模自治体と交流のあるピストイア市を訪問して、友好交流事情の調査です。

１１月５日：終日移動

１１月６日午前、シュツットガルトのプロホルツにある、国土・森林政策局を訪問。ジャン・ブルマー氏の案内により、バーデン＝ビュルテンベルク州農村地域・消費者保護省を案内され、ラルフ・ウイレ氏のヒヤリングを受けた。写真①　この州での木材の割合は３４％がトウヒ。２２％がブナで約半分を占めており残りの半分は白モミや針葉樹である。１年間に成長する木材の量と利用する木材の量の割合は１２．３対１１．６。つまり森林が減らないように使用されている。ちなみに、１日に成長する森林の量は４６０軒の家を造る量に匹敵するそうである。林業クラスター事業社２９,０００件、労働者２０万人、売上げ３１０億ユーロ（約４兆２４７０億円）。クラスターとは、林業関連事業全ての企業を意味する。ラルフ氏が特に強調されたのは、「木材が持つ環境保全事業」についてである。森林は二酸化炭素を吸収して酸素を排出する、また水の源であることから我々の生活に多大な影響を及ぼす。持続可能な社会、持続可能な開発、持続可能な環境政策等、現代社会のキーワードでもある「持続可能性」は、３００年前にドイツの林業から生まれた言葉だそうである。森から得られる資源には、木材・薪・炭・木酢・食料等があり、豊富な水をもたらしてくれる、こういった森林資源は鉱物資源と異なり再生産されるが、過剰な採取や管理の失敗でサイクルはたちまち崩れてしまう。「持続可能性」とは、森林の成長と森林利用のバランスから学びとった人間の知恵ということだろう。ドイツ林業３００年の歴史にはとても日本林業の歴史は及ばないが、森林に対する愛着心、森林管理の大切さをもっと持たなければいけないと感じた。写真②

写真①

写真②

国土・森林政策局を後にして、一つ目の現場見学先への移動のバスの中で通訳の松田さんからドイツの情報を聞かせていただいた。ドイツには６０か国からの移民が居ること、主にイタリア・トルコ・スペインからであること、ドイツの消費税は１９％でその他の税金も軒並み高いこと、その代わり社会保障制度が行き届いていること、総合大学卒業からのエリートと専門大学からのマイスターとの差（報酬）がほとんどないこと等。日本では木材が火に弱いイメージが定着しているが実は木材の耐火性は鉄骨よりも優れていること、これは日本での実証実験済みである。

写真③

１件目の見学先はケック有限会社・ホルツヘック製材所。写真③　４０名の家族経営で１１５年の歴史がある。３０,０００㎥の木材は主にブナと樫である。樹齢１５０～２５０年物を半径１００キロ圏内から集めるそうである。その品質の高さから国内での引き合いが高い。製材して５年間乾燥させた「白モミ材」は日本のヤマハピアノへ輸出されるそうである。写真④　ケック社長もまた、製材業に誇りを持っており、ドイツ林業の持続可能性を熱弁された。３００年の歴史の中でドイツの森の木材の品質とまとまった樹齢により持続可能な森林政策が受け継がれるわけである。森林の種類からみると、単造林（針葉樹等１種類の森林）のほうが複造林（針葉樹と広葉樹が混ざっている森林）よりも５倍の経済効力があると言われた。確かに伐採・持出しの面からみても作業効率は格段に差が出てくると思われる。ドイツの家は９９％がリノベーション。古い建物のほうが伸びしろがあり、暖房面でかなり差がでてくるそうである。ケック社長いわく、「一次産業はとても魅力のある仕事だ、ただなかなか嫁が行きたがらない」と言っていた。この問題は万国共通なのであろうか。ただ、林業マイスターは人々からリスペクトされている。資格と職業が連動しているところが流石にスケールの大きさを感じた。

写真④

２件目の見学先はロムバッハ建築木材・製材有限会社。ブナ材 CLT の製造をしている会社である。写真⑤　「ブナ材 CLT 断熱＋蓄熱＋不接着剤＋耐火性能」でかなり業績を伸ばしている会社だ。耐久試験で１,０００度の熱を１時間加えてたった２度しか上昇しなかったというデータがある。また、様々な型の材を組み合わせることにより無駄なく使っていくという BIM（ビルディング・インフォメーション・モビリティ）を採用。これはいわゆる「トヨタ方式」である。この会社もまた、「地元産の木材を使おう」という意識が非常に高い。環境に優しい＝地域の経済も潤う、こういう考えがドイツ林業の後押しをしているように思う。それが、エンドユーザーの意識を高めていると言えよう。

写真⑤

３件目の見学先はエヒテュレ製材合資会社。写真⑥白モミ専門の製材所である。こちらも半径１００キロ圏内から１５０～２５０年物の白モミ材を集材して主に高級家具材の材料として製造している。また、製材時に出る木クズを近くの業者から集めてバイオマス発電と地域にパイプラインにより熱供給をしている。一連のサイクルは地域の生活に十分貢献しており、エヒテュレ社長も今後のドイツ林業の可能性に期待大だと熱弁された。確かに今まで見学してきた会社ではおこなっていない、発電・熱供給システムをおこなっており、見学する側としても地域貢献の面から見ても非常に素晴らしい会社だと納得した。ここで驚いた事がある。当社で製造している製品のなかに日本へ輸出している物があった。それは、高級かまぼこの底板である。写真⑦　こんなものまで輸入している日本のメーカーの聞き取りをしたいところだ。当然だろうが、日本の高級材よりもドイツの輸入材のほうが低コストなのだろう。日本の流通に問題があると思われる。

写真⑥

写真⑦

予定外ではあったが、もう１か所「ゲルロズアウワー水車小屋」という道の駅風の店に立ち寄った。昔の水車小屋をブナ材で建て替えた大変お洒落な建物である。中にはゲストルームも完備されており一度泊まってみたいと思わせる雰囲気であった。写真⑧

写真⑧

１１月７日、ロッテンブルク林業大学での講義。こちらでも前日の現場で聞いた言葉がいくつも返ってきた。講師の先生は終始「持続可能な林業の重要性」を訴えられた。１７１３年つまり３００年前からのドイツ林業の重みであろう。１９５４年設立の当大学、１９７９年から修士課程が取得できるようになり、２００２年には持続性エネルギーの学科も、２００７年からは再生可能エネルギー（バイオマス）学科が、２０１２年からは地域マネジメント、２０１７年からは林業の経営学とあらゆる領域から学べる大学へ生まれ変わっていった。それまで総合大学でしか取得できなかった課程、例えばマイスターの資格も当専門大学で取得が可能となった。その気になれば、学生の途中からでもエリート資格が取得出来るコースへ編入出来るという事である。特にここ近年林業関係の学科が激増しているという事は、それだけ森林が持つ可能性や魅力がドイツの人々に定着しているという事である。大学での１年目に経済・植物学、一般教養を身につけ、２年目には伝統的な林業学・森林教育学・環境保護等を学び、３年目には専門科目・スペシャリスト講義・昔と現代の統合ディスカッション等が行われる。卒業後、マイスターの道か森林管理の道が拓けるのである。こういうことからも、学生に人気が高いのがうかがわれる。２００１年には３５０名だった学生が２０１７年にはなんと１００１名にまで増えた事も納得である。講義の総括としては、林業の持続性と戦略性、森林の可能性と環境保護だろう。最近では、街中で働くよりも自然の中で働きたい人が増加傾向だとか。人間生活の価値感の違いもあるし、ドイツは CO2 削減の為に林業を発展させているように感じた。そして、建築面では集合住宅の木材使用割合が増加していることからも、木を愛する心が養われているようである。ドイツ林業の強みとは、空気の綺麗さ、豊富な水と言われたが、岐阜県も同じ環境に恵まれている。ではなぜ我々の地域で林業が愛されないのか、県土の９０％近くもある宝の山の価値を見出せないのか。もっと、山に入りやすくしなければいけないと思うし、各市町村で「森の学校」みたいなカリキュラムを増やさないといけないと思う。そして、私有林を管理すれば必ずビジネスとして成り立つ仕組みを作らなければならないと思う。森林所有者のモチベーションが上がらないなか、どう上げていくかが大きな課題だ。林業が産業として成り立つには、あらゆる仕組みを変えなければならないが、今一度民間と行政が「森林の持つ可能性」をじっくり話し合う機会を作るべきだと痛切に感じたドイツでの森林政策の調査だった。写真⑨⑩

写真⑨

写真⑩

１１月７日午後スペインに移動、深夜に到着

１１月８日、スペイン、マドリッド市内にあるＧＡＳ（グローバル・アンテナ・ショップ）候補の「ＡＮＥＫＯ」を視察。写真⑪

スペインでの日本に関する話題が高まってる中、美濃焼・多治見

写真⑪

陶磁器・高山市伝統工芸品等様々な商品を取り扱ってみえた。昔は牛小屋だった納屋を改築して立派なショップにリノベーションして、小さな店舗ながらその発信力には学ぶところ大である。スペインの業者さんも「本物」にはこだわりが強く、特に岐阜県産には思い入れが強いようである。その流れは、急に始まったわけではなく、絶えず「本物の岐阜県商品」をセールスし続けた賜物ではないだろうか。「ＡＮＥＫＯ」販売員の玉置さをりさんも「本物だからこそ自信を持ってＰＲができます」と熱弁された。ここにひとつの「セールスの基本」を感じた。写真⑫

写真⑫

続いて、「岐阜県観光プロモーション・セミナー」に参加。写真⑬ 今年の夏に岐阜県内十数箇所をスペインのバイヤーがＰＲビデオ作成の為訪れており、そのＰＲビデオの発表とプレゼンがおこなわれた。冒頭古田知事の挨拶の中では「清流の国ぎふ」を強調された。写真⑭　約１６０名の観光関係者は食い入るようにステージを見ており、各地域の特産ＰＲの際に首を縦に振りながら満足げの様子だった。最近なぜスペインの観光客が増えているかが納得できる。（平成２７年１８０００人、平成２８年２３０００人）続いて「岐阜県観光プロモーション・レセプション」に参加。白川村・美濃市・関市・高山市・飛騨市・白川町等のブースでは各地域の観光宣伝がなされており、食のブースでは飛騨牛・飛騨りんご・本巣柿・地酒等が所狭しと並べられ関係者の興味をそそった。私も成原白川村長と共に飛騨のＰＲを行った。写真⑮⑯　ただ観光ＰＲブースでは、パンフレットのみを提供するところが多く、はたしてスペインの方々の心をとらえたかどうか疑問が残った。最近の傾向として、観光パンフレットだけでは印象に残らない感じがする。せめて、小物を添えた商品カタログのほうが心をとらえるのではないだろうか。会場で岐阜県をＰＲしたＵＳＢが無料で渡されたが素晴らしいプレゼントであった。要するに絶えず工夫しないと遅れてしまうという事だ。そして、楽しいところに人が集まるという事も忘れてはいけない。今後岐阜県の観光をＰＲするうえで参考にしていきたいアイテムである。参考までに、日本でのスペインの観光客が多い順に東京・大阪・京都・神奈川・岐阜、特に岐阜県内で今急増しているのが飛騨市である。

写真⑬

写真⑭

写真⑮

写真⑯

夜は、市内のキッチンスタジオにて「飛騨牛ＰＲイベント」を視察。写真⑰⑱　香港に始まり東南アジア、ヨーロッパ、アメリカ等既に１３の国・地域へ進出、「飛騨牛」推奨店は世界３３店舗、そしてスペイン初上陸の「飛騨牛」はスペイン人にどのような評価をされるのだろうか。非常に興味津々だった。スペインでは「イベリコ豚」が高級肉だがそれに匹敵するくらいのインパクトがあったようで、今後の飛騨牛輸出のエリアが増えることは間違いないだろう。ただ飛騨牛生産の現状を考えると手放しで喜べる状況でもない。今後、しっかりとした繁殖・肥育システム、後継者育成システムを構築していくことが岐阜県としての最重要課題ではないだろうか。いずれにしても、「飛騨牛」のブランド力は今後も世界各国で認められることだろう。先ず岐阜県として、飛騨牛（ひだぎゅう）の元である繁殖雌牛の増頭・小牛の安定供給に注力したい。

写真⑰

写真⑱

１１月９日マドリッドからサラマンカへ移動。岐阜県白川町にあった「辻楽器」の辻宏さんが１９８４年にサラマンカ大聖堂のパイプオルガンを修繕されたという経緯から、パイプオルガンを通じた文化交流が始まったという。交流の始まりは３０年前に遡るが、歴史の町サラマンカにおいて「ＪＡＰＡＮ」の工房魂が息づいていることに感動を覚えた。写真⑲⑳

写真⑲

写真⑳

続いてサラマンカ大学内にある「日西文化センター」を訪問。こちらでも親日の関係は深く、至る所に日西交流のポスターが掲示されていた。写真㉑　上の階に上がると「美智子ホール」という展示室があり、昔美智子妃殿下がお見えになった際に名づけられたらしい。月変わりで様々な日本文化の展示がなされる。写真㉒　総括すると、スペインとの「観光交流」も「文化交流」もお互いに認め合っての事業であり、お互いの利点を尊重し合って成り立っているものと思われる。今

写真㉑

写真㉒

後も様々な交流を通じて異国の文化を知り岐阜県の素晴らしさを再認識して深めていけたら良いと思った。

写真㉓

１１月１０日スペイン・マドリッドからイタリア・ピストイア市へ移動。白川町長に同行してピストイア市長を表敬した。飛行機のトラブルの関係で若干合流が遅れたため、１時間ほど市内を案内していただいた。写真㉓㉔　流石町全体から歴史を感じそんな素晴らしい町と岐阜県の小規模な町とが３０年来の交流があるということは大変意味深いものがあると感じた。サン・フィリッポ協会にある１７４５年のパイプオルガンも見せていただき生の演奏も聴かせていただいた。このオルガンも辻さんによって修復されたものだそうでその生音に感動を覚えたのは言うまでもない。ちなみに演奏された小西久美子さんはピストイアでは超有名な演奏者であった。写真㉕

写真㉔

写真㉕

夜、白川町長と合流し庁舎にてピストイア市長他関係者と面談。そこで学んだことは３０年来子供たちの交換留学によってお互いの文化を共有でき、その子供たちが将来ピストイアと岐阜県のかけ橋になってくれているということがいかに素晴らしく、いかに重要なことかということを再認識できたことである。県内４２市町村それぞれの事情もあるかと思うが、子供たちの国際交流は是非全域でやっていただきたいと強く感じたピストイア視察だった。写真㉖

写真㉖

１１月１１日　帰国の途へ
１１月１２日　帰国
今回の調査目的であった、ドイツでの林業・木材産業振興に関する調査、スペインでの岐阜県観光プロモーション・サラマンカとの友好交流事情の視察、イタリアでの自治体間交流の調査はとてもタイトなスケジュールでしたが、私にとって初めてのことであり非常に実りの多い体験でした。岐阜県に関係の深い「森林政策」「飛騨牛と観光」「友好交流」すべてにおいて学ぶべき事が多くまた、今後の岐阜県の政策に活かしていきたい、活かさなければいけないヒントをいただきました。
ありがとうございました。

岐阜県議会議員　布俣正也